

彷徨へる心のままに

(昭和二十四年寮歌)

池田基君 作歌
伊藤嘉弘君 作曲

序

彷徨へる心のままに
見返りの陵を登れば
野は遙か去にし日の面影
簫々の闇にとけゆく
斯くあるは人の宿命か
天地に星の飛ぶなり

冬

雪の舞ふ砂丘薄れて
光輝なき旧りし仕種は
忘却の寄る汐音に
消え去りぬ名残の水際
叫ぶには余りに深く
涙には余りに虚し

春

清冽の玉散る知性
燃え狂ふ情熱の
若き身の裏に留めて
相剋の旅を逝くなり
苦悩しみに頬を濡らせば
春雨も楡影つたふ

夏

初夏の野に陽炎たてば
痛ましき魂の疵の
陽に癒えて幸福は希望は
微風に咲き出づる華
育くみし白珠の水
浜茄の赤き血潮よ

秋

秋深き磯に佇み
汐飛沫浴びし彼の時
月影に宿命解かんと
友垣の誓ひし言葉
斯く故に千草ふみしき
寥々の孤杖を運ぶ

結

三春秋の絢夢原始林影に
散り果てて悲哀を秘めつ
陵を去る遊子の瞳
又燃えぬ愛情と決意に
暁の新たな旅出
永遠に時は流れぬ